

(9) 2010年度 中期留学第9期生の選抜時と帰国後の英語力の変化〔笠原 正秀〕

はじめに

本稿では、2010年度中期留学第9期生（以下、第9期生と記す）の選抜時と帰国後の英語力の変化を TOEIC の得点をもとに検証し、その報告とする。最初に、選抜時と帰国後の TOEIC の各項目別（リスニング・リーディング・合計、以下 TOEIC における項目とは、これらの3項目を指す）平均値から全体像を概観する。次に、中期留学（英語圏）提携校、全7校間個別に TOEIC の得点変化を項目別の得点とその伸びの両面から統計的に処理を行い、検証する。3点目に、選抜時と帰国後の TOEIC の得点から、それらの相関性の有無を確認する。2006年度第5期生（以下、第5期生と記す）の事例では $r = .69$ という高い相関係数（ピアソン積率相関係数；以下、 r と記す）が示され、その相関性の一般化を謳った（笠原，2007）。しかし、2009年度第8期生（以下、第8期生と記す）のデータ分析を再び

行った際には、リスニング $r = .313$ ；リーディング $r = .136$ ；合計 $r = .298$ という低い相関に止まる結果となり、選抜時と帰国後の英語力の相関性を一般化することの難しさを示す結果となった。今回、第9期生の結果に対してもこれまでと同様、相関性の検証を行う。また、本稿では、第9期生の結果だけでなく、英語力測定に TOEIC を使用するようになった第6期生以降のすべてのデータを用い、分析を行う。最後に、選抜時と帰国後の TOEIC に得点差が目視できるが、そうした得点差は見かけだけのものではなく、統計的にも有意であるか、を検証する。第9期生の選抜時と帰国後に受験した TOEIC の各項目別得点にみられる変化を、上述の4点から概観し、第9期生の英語力の実態と選抜時と帰国後にみられる英語力の変化、そしてその特徴を示す。

選抜時と帰国後の TOEIC の各項目別平均値

第9期生の選抜時と帰国後の TOEIC の結果は以下のとおりであった（表1.参照）。例年の傾向ではあるが、各項目とも選抜時から比べ、帰国後の得点（平均）が大きく伸びていることがわかる。また、第9期生の TOEIC の得点分布を箱図で示すと

図1.のようになる。リスニング・リーディングともに全体的に右上がりに移り変わっていることがわかる。統計的な裏付けは後項にゆずるが、全体的に伸びた、と考えられる動きが示されている。

表1. 選抜時と帰国後の TOEIC 結果

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
選抜時のリスニング点	30	200	345	274.00	38.716
帰国後のリスニング点	30	310	480	392.33	50.253
選抜時のリーディング点	30	125	270	203.50	41.025
帰国後のリーディング点	30	170	385	287.33	50.884
選抜時の合計点	30	350	600	477.50	64.884
帰国後の合計点	30	510	865	679.67	84.923
有効なケースの数（リストごと）	30				

しかし、表1.をみてもわかるように、選抜時よりも帰国後の標準偏差（以下、 SD と記す）が大きくなっている。つまり、全体的に得点そのものは高くなっているが、その半面、正規分布のすそ野も

広がっているのである。言い換えれば、上位と下位の得点分布の幅が選抜時に比べ広がった、といえる。

リスニングに関しては、得点分布の幅は選抜時に比べ、若干、上下に広がっていることがわかる（図1.参照）。しかし、箱およびヒゲの形状そのものは選抜時のものと帰国後のものと非常によく似ている。箱部分も、選抜時に比べ、帰国後のもの

は縦長になってはいるものの中央値も箱内の中央よりやや下方の、選抜時と類似した位置に示されており、やや上下に広がりはあるものの、選抜時の得点分布状況をそのままに上方に押し上げられた形とみることができる。

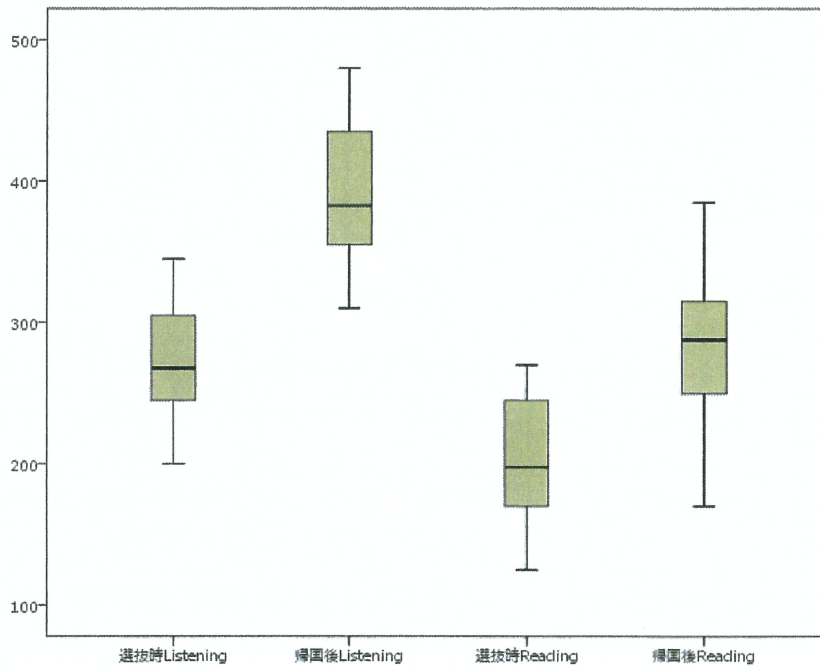


図1. 選抜時と帰国後のリスニングとリーディングの平均値（箱図）

リーディングに関しても、得点分布の幅が選抜時に比べ、大きく広がっていることがわかる（図1.参照）。特に、箱上部のヒゲ部分（上位25%）：最大値から第3四分位 (Q_3) と箱下部のヒゲ部分（下位25%）：第1四分位 (Q_1) から最小値の得点幅が極端に広がったことがみてとれる。また、箱そのものの大きさが小さくなっており、中位50%の得点分布が密になっていることがわかる。箱内に示されている中央値の位置も箱下部から箱上部へと移動しており、中央値から第1四分位（中位層の下位25%）の得点分布状況よりも第3四分位から中央値（中位層の上位25%）の方が、得点差のないことがわかる。全体としては、特に箱上部と下部にある

ヒゲ部分（上位25%と下位25%）が得点分布の幅を広げている原因とみることができる。つまり、リーディングに関しては、中位50%の層の得点分布は、選抜時に比べ帰国後の方が、得点幅が小さくなっており、同様のリーディングの力をつけてきているが、上位25%と下位25%の層内の得点幅は逆に大きくなっている、ということである。

合計もリスニング・リーディングと同様、全体として右上がりに移動している（図2.参照）。こちらも統計的な裏付けは後項での分析にゆずるが、全体として伸びた、と考えられる変化がうかがえる。選抜時に比べ、帰国後の形状は縦に長くなっており、得点分布の幅が広がっていることがわかる。

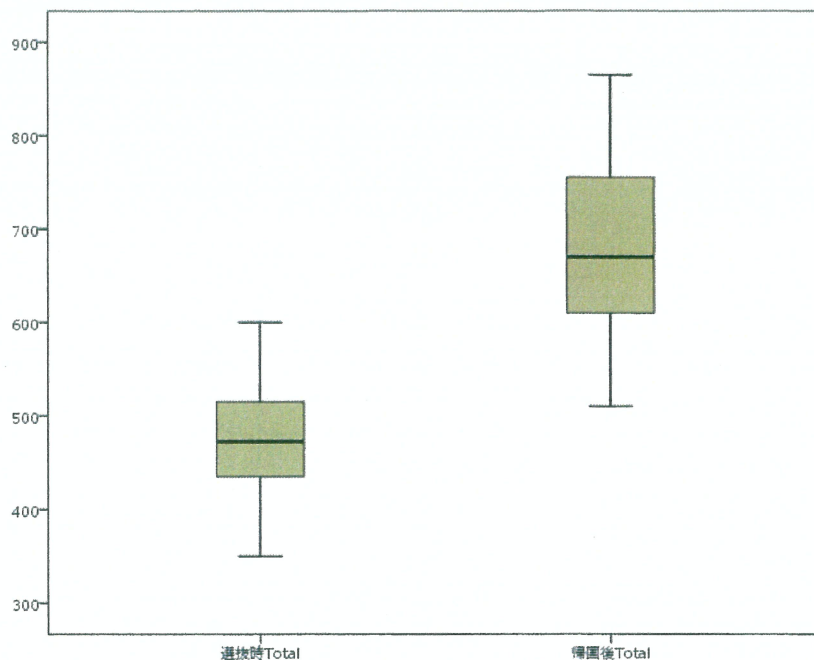


図2. 選抜時と帰国後の合計の平均値（箱図）

選抜時の箱部分の形状が縦に小さくつぶれたようになっているのは、第3四分位から中央値と中央値から第1四分位までの中位50%の得点幅が小さいことを示している。つまり、選抜時において、中位50%の合計得点にあまり差はなかった、ということである。また、中央値が箱内のちょうど真ん中あたりに示されているが、これは中位層の上位25%と下位25%の得点幅は、ほぼ同じであったことを示している。帰国後、箱そのものの大きさが選抜時に比べて、縦に長くなっているのは、得点分布の幅が広がったことを示している。また、中央値も選抜時から比べ、箱内のやや下部に移動しているが、これは中位層の上位25%の合計得点分布状況が、中

位層の下位25%よりも得点幅が広がったことを示している。箱上部および下部から伸びているヒゲも、選抜時のものと比べ長くなっている。つまり、上位25%の得点分布状況も、下位25%の得点分布状況も、選抜時に比べ、その幅が広がったことがわかる。合計得点の分布に関しては、選抜時よりも帰国後の方がその幅が広がっている、つまり、差がついた、あるいは、ちがいが生じた、とみることができる。こうした得点分布の変化は、帰国後において高い得点を取った学生とそれに比べて低い得点であった学生との差が、選抜時の分布状況と比べ、広がったと考えることのできるものである。

留学先および TOEIC の項目別 選抜時と帰国後の英語力の変化

留学先別および TOEIC の各項目別、選抜時と帰国後の英語力の変化は表2.のとおりである。これらを視覚化するためにグラフにしてみると、以下の図3.から図6.のように表される。まず、リスニング

からみる（図3.参照）。

選抜段階において、他6校と比べて平均の隔たったところが1校（E校）ある。また、帰国後、平均の良好なところが2校（A校とD校）確認できる。

表2. 選抜時と帰国後の TOEIC 結果（留学先別）

留学先	リスニング		リーディング		合計	
	選抜時	帰国後	選抜時	帰国後	選抜時	帰国後
A校 平均値	299.00	442.00	195.00	293.00	494.00	735.00
標準偏差	25.348	20.797	50.621	33.653	56.833	47.828
B校 平均値	288.75	341.25	192.50	278.75	481.25	620.00
標準偏差	25.941	36.142	22.546	67.004	20.156	58.023
C校 平均値	281.67	366.67	226.67	266.67	508.33	633.33
標準偏差	55.076	22.546	62.517	33.292	95.175	20.817
D校 平均値	297.50	436.25	217.50	331.25	515.00	767.50
標準偏差	39.686	57.789	46.637	51.377	85.732	97.425
E校 平均値	222.50	365.00	172.50	271.25	395.00	636.25
標準偏差	21.016	57.879	21.016	28.395	39.370	60.742
F校 平均値	265.00	390.00	200.00	308.75	465.00	698.75
標準偏差	33.912	24.833	54.467	67.004	81.752	89.942
G校 平均値	264.17	388.33	220.00	265.83	484.17	654.17
標準偏差	32.927	42.622	27.203	56.517	31.846	95.363
合計 平均値	274.00	392.33	203.50	287.33	477.50	679.67
度数	30	30	30	30	30	30
標準偏差	38.716	50.253	41.025	50.884	64.884	84.923

※ 各校個別の度数については、学校名が特定される可能性を考慮し、掲載せず。

※ 帰国後の得点には下線を施した。

※ 選抜時よりもSDの数値が小さくなったものにはマーカーをつけた。

その2校ともが選抜段階において、リスニングの平均の比較的良い群（A校・B校・C校・D校）に所属しており、A校とD校はその群の中の1番目と2番目の学校である。こうした点にも、留学前の段階で

英語力が高ければ高いほど、留学という学びの過程をとおして更に英語力を伸ばすことができる、とする傾向の一端をみることができる。選抜時において、他校と比べ、平均の低かったE校も、帰国

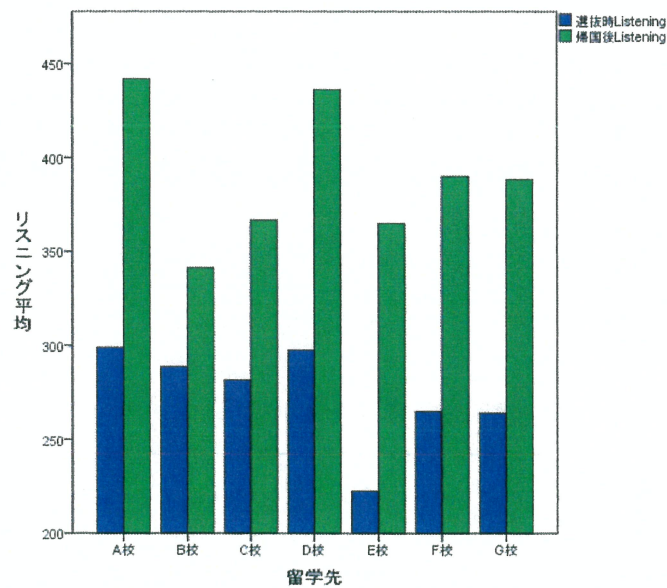


図3. 留学先別 TOEIC リスニング得点の変化

後は他校と比べ、遜色のない程度に平均を大きく伸ばしているが、下位から2番目という結果であった。E校のリスニングの伸びそのものは決して小さくはないにもかかわらず、結果的に、他校の得点に追いつけなかったのは、選抜時の得点が低かったため、といえよう。

以下のような興味深い発見もあった。A校・C校・F校の3校に関しては、選抜時よりも帰国後の方が

SDの数値が小さくなっており、得点の緊密化がみられる（表2.のマーカ一箇所参照）。これは選抜時の得点幅よりも、留学という学びの過程を経ることにより、得点幅が小さくなった、ということであり、リスニングの力が選抜時よりも帰国後の方が類似したレベルに変わった、ということである。

次に、リーディングをみる（図4.参照）。

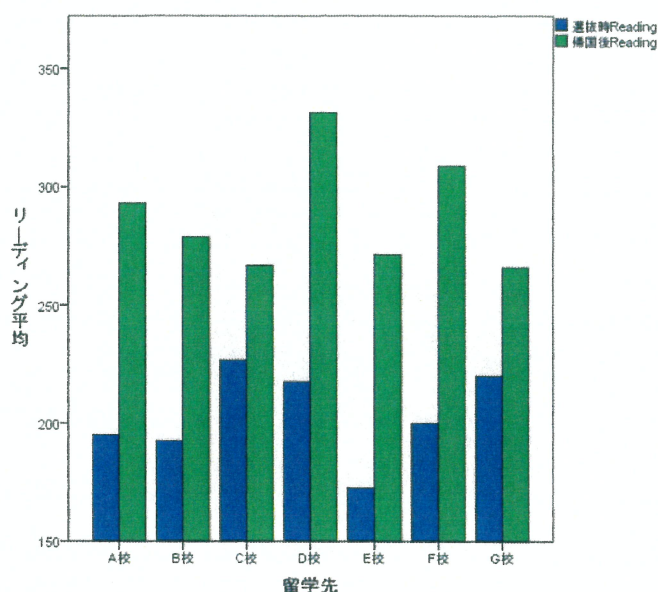


図4. 留学先別 TOEIC リーディング得点の変化

選抜段階において、比較的リーディングの平均の高い第一群として3校（C校、D校、G校）がみとれる。その次に、第二群としてA校・B校・F校の3校がある。逆に、平均の低いところとして、1校（E校）、その存在が確認される。帰国後の平均をみると、最も高い平均を示しているのはD校であり、選抜時において第一群に所属している学校である。また、2番目に高い平均を示したのはF校であり、これは第二群の学校である。そして、3番目に高い平均を示したのがA校であり、こちらも第二群の学校である。残りの4校の帰国後の平均はほぼ横並びであった。強いて言うならば、B校が、若干、他の3校と比べ高い平均を示しているが、こち

らも第二群の学校である。つまり、第二群の学校はすべて帰国後、上位4校に入る結果となっている。リーディングに関しては、リスニングほど明確ではなかったが、それでも、留学前の段階で英語力が高ければ高いほど、留学という学びの過程をとおして更に英語力を伸ばすことができる、という傾向を十分に示している結果であった。

次のような発見もあった。C校は選抜時に比べ、帰国後のSDの数値が小さくなっており、得点の緊密化がうかがえる（表2.のマーカ一箇所参照）。これは選抜時の得点幅よりも留学という学びの過程を経ることにより、得点幅が小さくなった、ということであり、リーディングの力が選抜時よりも

類似したレベルになった、ということである。

最後に、合計得点を見る(図5参照)。選抜時において6校(A校・B校・C校・D校・F校・G校)がほぼ横並びの状態である。強いて言うならば、その中の2校(C校・D校)に関しては、他4校と比べ、若干、高い得点を示している。E校に関しては、リスニング・リーディングともに最も低かったこともあり、合計においても得点は伸びず、最も低い

得点となっている。つまり、選抜段階においては、リスニングで点数がとれたり、リーディングで点数がとれたりしているため、総合してみると、E校を除いて、その他の学校間で大きな差は生じていなかったことがうかがえる。しかし、統計的な意味での差の有無については、後項にゆずりたい。

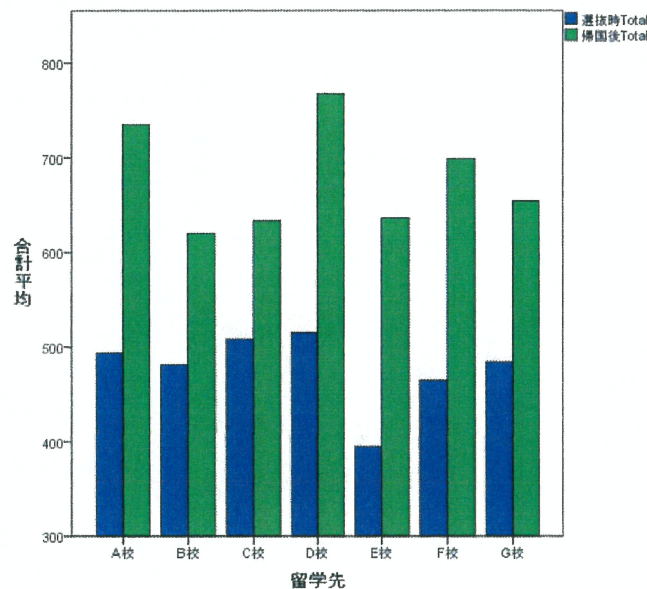


図5. 留学先別 TOEIC 合計得点の変化

帰国後の得点を見てみると、A校とD校の2校が飛びぬけて高い得点を示している。続いてF校が高い得点を示している。残りのB校・C校・E校・G校の4校は、ほぼ横並びといった結果である。上述のとおり、E校以外は選抜段階において大きな差はうかがえず、ほぼ横並びであったにもかかわらず、帰国後にこれだけ大きな差となって表れたのは、何らかの要因があるものと考えざるを得ない。合計得点において考慮・検討すべき、合計を構成するリスニングやリーディングの各項目については、本項の前半で言及している。しかし、その要因については、今後の調査・検討の必要なところと考える。

合計においても、リスニング・リーディングと

同様に、興味深い発見があった。A校とC校は、選抜時に比べ、帰国後のSDの数値が小さくなっており、得点の緊密化がうかがえる。これは選抜時の得点幅よりも留学という学びの過程を経ることにより、得点幅が小さくなった、ということであり、トータルとしての英語力が類似したレベルになった、ということである。特にC校に関しては、リスニングのSDの数値が選抜時の半分以下となり、リーディングのSDの数値は約半分、そして合計が1/5程度になっている(表2のマーカー個所参照)。C校に留学した学生間の英語力がきわめて類似したレベルに集中していることがわかる。

こうした結果を総合的に考えてみると、リスニング・リーディングともに力を付け、得点を伸ば

すのが望ましい形であるのはいうまでもないが、リスニングにみられた差以上にリーディングでつく差の方が得点としては、はるかに大きく跳ね返ってくるものといえる。これは、笠原(2011a, 2011b)において指摘されていた点であるが、学生たちの留学の目的の中に、英語力に関係するものとして“スピーキングの力を伸ばす”“リスニングの力を伸ばす”という点は多くの学生たちが記していたことであったが、“リーディングの力を伸ばす”というものはほぼ皆無であり、いかに学生たちがリーディングというものに対してあまり目を向けていないかが容易に理解できるものであった。

笠原(2011a, 2011b)の指摘は、2009年度の中期留学および中期ブリッジに参加した学生のアンケート結果から見出したものであり、第9期生にも同様の指摘が当てはまるか否かは、第9期生の回答したアンケートの集計作業が完了していない現段階において、断定的には語れない部分ではあるが、笠原(2011a)が指摘するように、リーディングやライティングといった力は、自ら何かを“読む”

機会や“書く”機会を求め、鍛錬しないとなかなか身につかない技能でもあり、そうした目標を掲げ取り組もうと本人が努力しなければ、なかなか容易には身につけられるものではない。そういった意味でも、苦勞なしにはなかなか身に付けることのできない力をいったん自分のものにできた時、それは自分自身の英語力全般に大きく影響するもの、といえよう。

ここまでは、記述統計報告とグラフから第9期生の英語力の変化および留学先別の英語力の変化をみてきたが、次は、もう一段階精緻な分析結果を以下に示す。留学先別に TOEIC の各項目の得点を分散分析したところ(表3.参照)、選抜時・帰国後ともにリスニングにおいてのみ、留学先学校間に5%水準で有意な差が認められた(選抜時: $F(6, 23) = 2.68, \eta = .642, p < .05$; 帰国後: $F(6, 23) = 3.62, \eta = .697, p < .05$)。つまり、留学先学校間において、選抜時においても、帰国後においても、リスニングの得点に差がある、ということが示された。

表3. 選抜時と帰国後の TOEIC の項目別得点差(留学先別)に対する分散分析結果

			<i>df</i>	<i>F</i>	η	<i>p</i>
選抜時	グループ間	(結合)	6	2.682*	.642	.040
リスニング × 留学先	グループ内		23			
	合計		29			
帰国後	グループ間	(結合)	6	3.620*	.697	.011
リスニング × 留学先	グループ内		23			
	合計		29			
選抜時	グループ間	(結合)	6	.839	.424	.553
リーディング × 留学先	グループ内		23			
	合計		29			
帰国後	グループ間	(結合)	6	.964	.448	.471
リーディング × 留学先	グループ内		23			
	合計		29			
選抜時	グループ間	(結合)	6	1.733	.558	.158
合計点 × 留学先	グループ内		23			
	合計		29			
帰国後	グループ間	(結合)	6	2.362	.617	.063
合計点 × 留学先	グループ内		23			
	合計		29			

次に、留学先別に選抜時と帰国後の項目別に得点の伸びを測定したところ、表4.のような結果となった。選抜時と帰国後にみられる得点の伸びは、リスニング：平均118.33（最大値143.00，最小値

52.50）；リーディング：平均83.83（最大値113.75，最小値40.00）；合計：平均233.75（最大値252.50，最小値125.00）という結果であった。

表4. 選抜時と帰国後の TOEIC 得点における各項目の伸び（留学先別）

留学先	選抜時と帰国後の差		選抜時と帰国後の差	
	リスニング	リーディング	合計	
A校	平均値	143.00	98.00	241.00
	標準偏差	39.306	41.018	46.824
B校	平均値	52.50	86.25	138.75
	標準偏差	41.932	55.132	74.092
C校	平均値	85.00	40.00	125.00
	標準偏差	35.000	47.697	80.467
D校	平均値	138.75	113.75	252.50
	標準偏差	23.585	23.936	18.484
E校	平均値	142.50	98.75	241.25
	標準偏差	63.574	26.260	65.368
F校	平均値	125.00	108.75	233.75
	標準偏差	33.665	46.971	61.424
G校	平均値	124.17	45.83	170.00
	標準偏差	32.622	50.539	70.922
合計	平均値	118.33	83.83	202.17
	度数	30	30	30
	標準偏差	47.167	47.700	73.446

この結果をグラフ化すると、図6.のようになる。リスニングの伸び（青棒）に関しては、多くは横

並びであるが、他校から比べて伸びの小さいところが2校（B校とC校）あることがわかる。

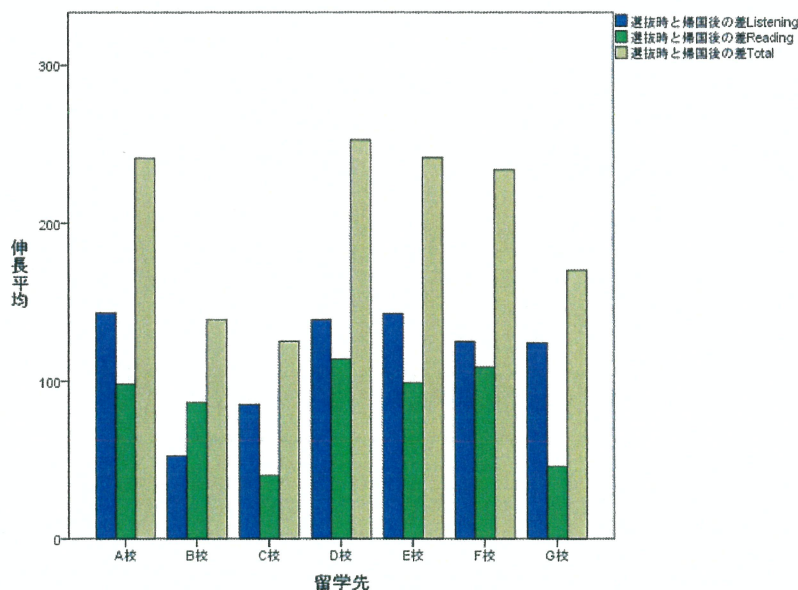


図6. 留学先別 TOEIC 各項目の得点伸長

また、リーディングの伸び(緑棒)についても、多くは横並びであるが、他校と比べて伸びの小さいところが2校(C校とG校)あることがわかる。合計点の伸び(黄棒)に関しては、差はあるものの多くの学校が大きく伸ばしている中、他校と比べて伸びの小さいところが2校(B校とC校)ある。統

計的な裏付けは後項にゆずるが、B校とC校に関しては、リスニング・リーディングともに他5校と比べ伸びが小さい。また、G校に関しては、リスニングの伸びは他校と同程度であるが、リーディングの伸びが小さいことがわかる。そして、これらの結果を分散分析してみた(表5.参照)。

表5. 選抜時と帰国後の TOEIC の項目別得点伸長差(留学先別)に対する分散分析結果

			df	F	η	p
選抜時と帰国後の差	グループ間	(結合)	6	2.957*	.660	.027
リスニング × 留学先	グループ内		23			
	合計		29			
選抜時と帰国後の差	グループ間	(結合)	6	1.971	.583	.112
リーディング × 留学先	グループ内		23			
	合計		29			
選抜時と帰国後の差	グループ間	(結合)	6	2.942*	.659	.028
合計点 × 留学先	グループ内		23			
	合計		29			

リスニングと合計に5%水準で有意な差が認められた(リスニング: $F(6, 23) = 2.957, \eta = .660, p < .05$; 合計: $F(6, 23) = 2.942, \eta = .659, p < .05$)。リーディングには、5%水準で有意な差は確認されなかった(リーディング: $F(6, 23) = 1.971, \eta = .583, p > .05$)。

つまり、リスニングに関しては、留学先により、その伸び方、つまり伸びた量に差が認められたが、リーディングにはその差はなかった、つまり、同様であった、ということである。

選抜時と帰国後の TOEIC にみられる相関性

選抜時と帰国後の得点間の相関性を確認するために、TOEIC の各項目別に得点間の r を算出した(表6.参照)。それぞれの r は以下の通りであった: リスニング $r = .462^*$; リーディング $r = .478^{**}$;

合計 $r = .547^{**}$ ($*p < .05, **p < .01$)。これらすべての項目において「かなり(比較的強い)相関がある($\pm .40 < r < \pm .70$)」という数値が示された。

表6. 選抜時と帰国後の TOEIC にみられる項目別相関(第9期生のみ)

		1	2	3	4	5	6
1. 選抜時	リスニング	—	.324	.801**	.462*	.300	.453*
2. 選抜時	リーディング		—	.825**	.255	.478**	.437*
3. 選抜時	合計			—	.437*	.481**	.547**
4. 帰国後	リスニング				—	.410*	.837**
5. 帰国後	リーディング					—	.842**
6. 帰国後	合計						—

(N=30)

** . 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

* . 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

また、そのすべてにおいて5%もしくは1%水準で有意な相関が確認された。つまり、選抜の段階で高い得点であった者は帰国後も高い得点を示し、選抜の段階で低い得点であった者は帰国後もやはり低い得点である可能性がある、とする仮説が支持される結果となった。選抜時と帰国後における英語力の相関については、笠原（2011b）においても触れられたが、数値的にはそうした仮説を支持する結果は得られなかった。笠原（2011b）は、その原因として、一年、一年の単発の分析では、年

によりこうした仮説が支持されたり、支持されなかったりすることの可能性を指摘し、中期留学の選抜および帰国後の英語力の測定に TOEIC を使用するようになった第6期生以降の全データを使用し分析することの必要性を指摘している。

表7は、選抜時および帰国後の英語力測定に TOEIC を使うようになった第6期生から第9期生までの全データをもとに、選抜時と帰国後の TOEIC の各項目間の相関を調べたものである。

表7. 選抜時と帰国後の TOEIC にみられる項目別相関（第6期生から第9期生）

	1	2	3	4	5	6
1. 選抜時 リスニング	—	.550**	.875**	.465**	.453**	.519**
2. 選抜時 リーディング		—	.886**	.363**	.486**	.480**
3. 選抜時 合計			—	.469**	.534**	.567**
4. 帰国後 リスニング				—	.566**	.884**
5. 帰国後 リーディング					—	.886**
6. 帰国後 合計						—

(N=100)

**、相関係数は 1% 水準で有意（両側）

それぞれの r は以下のとおりである：リスニング $r = .465^{**}$ ；リーディング $r = .486^{**}$ ；合計 $r = .567^{**}$ 。これらすべての項目において「かなり（比較的強い）相関がある（ $\pm .40 < r < \pm .70$ ）」という数値が示された。また、そのすべてにおいて1%水

準で有意な相関が確認された ($p < .01$)。過去4か年のデータからも、この仮説を支持する結果が得られた。やはり、留学出発前の英語力が、留学という学びの過程をとおし、英語力が大きく伸びるか否かを左右する要因のひとつといえる。

選抜時と帰国後の TOEIC の得点差にみられる有意性

選抜時と帰国後の各項目の平均値に t 検定を実施した（表8参照）。そのすべてに0.1%水準で有意な差が確認された（リスニング： $t = 13.741$, $df = 29$, $p < .001$ ；リーディング： $t = 9.626$, $df = 29$, $p < .001$ ；

合計： $t = 15.077$, $df = 29$, $p < .001$ ）。すべての項目において、選抜時と帰国後の得点間に有意な差が生じていることが確認された。

表 8. 選抜時と帰国後の各項目に実施した t 検定結果

	対応サンプルの差						t 値	自由度	有意確率 (両側)
	平均値	標準偏差	平均値の差の 95% 信頼区間			t 値			
			標準誤差	下限	上限				
リスニング（帰国後—選抜時）	118.333	47.167	8.611	100.721	135.946	13.741	29	.000	
リーディング（帰国後—選抜時）	83.833	47.700	8.709	66.022	101.645	9.626	29	.000	
合計（帰国後—選抜時）	202.167	73.446	13.409	174.742	229.592	15.077	29	.000	

統計的にも得点が伸びていることが証明されたわけである。言い換えれば、TOEIC という英語力測定テストの基準において、第9期生はたしかに英

語力が伸びた、といえる結果を収めているということである。

おわりに

本稿では、第9期生の選抜時と帰国後の英語力の変化を TOEIC の得点をもとに検証、報告した。最初に、選抜時と帰国後の TOEIC の各項目別の平均値を概観した。どの項目も得点を伸ばしているが、その内訳をみても、リスニングに関しても、リーディングに関しても、帰国後の得点幅が広がっていることがわかった。特に、リーディングに関しては帰国後の得点幅は大きく、その傾向は上位25%と下位25%において顕著にみられる傾向であった。逆に、中位50%の得点幅は狭まり、緊密化がうかがえた。特に、中位50%の中の上位25%は、選抜時の半分程度の範囲に得点が集中していた。一方、合計については、中位50%における得点幅は選抜時の2倍の幅に広がっていることがわかった。つまり、選抜時においては中位50%のトータルとしての英語力は、みな同様であったが、留学という学びの過程を経ることにより、その区分の中での得点差が生じた、ということである。

次に、留学先別に選抜時と帰国後の TOEIC の各項目に表れた変化をみた。留学先のすべてにおいて、TOEIC の全項目で選抜時と帰国後との間で得点を伸ばしている傾向がうかがえた。リスニングに関しては、選抜時および帰国後の双方において留学先間に有意な得点差のあることが確認された。半年間の留学をとおして、リスニングにおいては留学先により得点差が生じたが、リーディングおよび合計の2項目に関しては、すべての学校が得点的には同様である、といえる結果が示された。また、各項目の得点の伸びについては、リスニングと合計の2項目で留学先学校間に有意な差が確認されたが、リーディングについては有意な差は確認されなかった。留学先により、リスニング力の

伸びに差のあることがわかった。

3点目に、選抜時と帰国後の TOEIC の結果からその相関性を探った。リスニング・リーディング・合計ともに、「かなり(比較的強い)相関がある」とされる r が算出された。また、これらの数値はすべての項目において有意であった ($p < .05$ もしくは $p < .01$)。つまり、留学前の英語力と留学後の英語力の相関性については、第9期生の場合は支持される結果となった。また、今回は第6期生以降の TOEIC データのすべてを用いた分析も実施した。その結果、すべての項目において、「かなり(比較的強い)相関がある」とされる r が示され、それらの数値のすべてにおいて有意であった ($p < .01$)。選抜時(留学前の段階)において高い英語力であるほど、留学という学びの過程をとおしてますます英語力が伸びる(帰国後の TOEIC において高い得点が望める)、といえる結果を得た。

最後に、選抜時と帰国後の TOEIC の各項目にみられる得点差の有意性を確認した。その結果、リスニング・リーディング・合計のすべての項目に有意な得点差が確認された ($p < .001$)。半年間、英語圏に滞在し英語を学ぶことにより、確実に出発時よりも英語力をつけて帰国している、といえる結果であった。リスニング392.33、リーディング287.33、合計679.67という数値はあくまでも平均であり、この数値よりももっと高い得点をとった者もいれば、これよりも低い得点であった者もいる。それが現実である。平均という数字のマジックにごまかされてほしくはない。しかし、個々のとった得点が、そうした半年間にかけてのお金と時間の成果として十分なものであったか否かは、学生ひとりひとりの自己評価に頼るしかない。この点に

については、各々が今回の留学に際し掲げていた目的や目標にどれだけ近づき、達成することができたかにより自己評価の分かれるところと考える。第8期生の場合もそうであったが、学生たちの留学の目的は“英語力の増強”という点ばかりでなく、“異文化体験”や“海外に友人や知り合いを作りたい”など多岐にわたっていた。そうした英語力の伸びだけで測ることのできない部分も留学の目的の中に含まれている。しかし、英語力というのは、留学の成果としてもっとも目に見え易い形であることも事実である。

今回、第9期生の選抜時と帰国後に受験したTOEICの各項目別得点の変化を上述の4点から概観し、学生の英語力の実態とその変化の特徴をみてきたが、全体的にはきちんと英語力をつけてきてくれたことのわかる結果であった。しかし、特にリーディングに関しては、その力（得点）の分布の幅が広いことがわかった。第9期生に対しても昨年同様、「留学満足度調査」を行っているが、その集計がまだ完了していないため、第9期生に当

てはめて言及することは的を射ていない部分も考えられるが、第8期生のアンケート調査結果を参考にすると、学生は留学という過程のなかで、リーディングという技能を留学の目的としてあまり重視していない傾向がうかがえた(笠原, 2011a)。しかし、情報のインプット（入力）の術^{すべ}という点では、四技能の中でも非常に重要な役割を担うものであり、軽視してはならない、と強く主張したい。また、中期留学から帰国後、各ゼミで卒業研究を行い、その成果として卒業論文を作成するに際し、この“読む”ということが非常に重要なコミュニケーション技術であることを実感するはずである。昨年も同様の指摘をしたが、この“読む”ことをあまり重視しない姿勢は、母語である日本語でも同様のことがいえ、近年の活字に目を向けることを得意としない学生の傾向を反映した結果とみることもできよう。ましてや、外国語である英語で“読む力”をきちんと身に付けようとするのであれば、本気で取り組まなくては容易に身に付くものではない、と最後に記しておきたい。

引用文献

笠原正秀 (2007) 中期留学プログラムの目指す英語力—第5期生の選抜時と帰国後の TOEIC の結果から—『2006年度中期留学報告書』(pp.62-70). 椋山女学園大学国際コミュニケーション学部中期留学委員会
笠原正秀 (2011a) 2010年度中期ブリッジ・中期留学アンケート調査結果『2010年度椋山女学園

大学学園研究費 (C) 「海外留学事前事後指導の基礎研究」研究報告書』(pp.1-41).

笠原正秀 (2011b) 2009年度 中期留学第8期生の選抜時と帰国後の英語力の変化『2009年度中期留学報告書』(pp.31-38). 椋山女学園大学 国際コミュニケーション学部